

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25463615

研究課題名(和文) 精神障害者家族ピア教育プログラムの波及効果とシステムの評価

研究課題名(英文) Evaluation of dissemination and system of a program of family peer-education for family members of persons with mental disorders

研究代表者

蔭山 正子 (Kageyama, Masako)

東京大学・医学(系)研究科(研究院)・助教

研究者番号：80646464

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：精神障害者の家族ピア教育プログラムが開発され、効果が明らかになっている。家族支援の社会資源が限られている本邦においてこのプログラムをより多く普及させることが重要である。本研究では、質担保に必要なフィデリティ尺度の開発、プログラム実施主体の家族会組織への効果評価、普及の促進・阻害要因の検討などを行った。その結果、効果的な普及システムの発展に寄与した。

研究成果の概要(英文)：The family peer-education program for family members of persons with mental disorders has been developed and its effectiveness has been examined. In Japan where support resources are limited for family members, the program is needed to disseminate nationwide. Our research project was conducted development of fidelity scale, effectiveness evaluation for family groups by complementation of the program, examination of factors of promotion and inhibition for dissemination of the program. The project has contributed to development of dissemination system of the effective program.

研究分野：公衆衛生看護

キーワード：精神保健 プログラム評価

#### 1. 研究開始当初の背景

精神障害者の家族ピア教育プログラム「家族による家族学習会」が開発され、効果が明らかになっている。家族支援の社会資源が限られている本邦においてこのプログラムをより多く普及させることが重要である。

#### 2. 研究の目的

本研究では、「家族による家族学習会」がもたらすプログラム実施主体の家族会への波及効果、および、プログラムのシステム評価を行うことを目的とする。

#### 3. 研究の方法

##### 1) プログラム採用の関連要因の検討

プログラムを実施した家族会へのインタビュー調査を実施した。ケーススタディを行い、プログラム採用の要因を検討した。その後、プログラム未実施の家族会を対象とした自記式アンケート調査を行い、採用に関連する要因を検討した。

##### 2) プログラム継続の関連要因の検討

プログラム実施の家族会を対象として自記式アンケート調査を行い、継続実施に関連する要因を検討した。

##### 3) 家族会への波及効果の検討

プログラムを実施したところのある家族会に自記式アンケート調査を行い、組織発展に関わる項目から組織発展に寄与するか否かを検討した。

##### 4) グループ機能尺度の開発

プログラムを実施したところの実施後、参加者および担当者に自記式アンケート調査を行い、プログラム実施中にグループがどのような治療的効果をもっていたかを尺度を用いて検討した。Therapeutic Factors Inventory-19の日本語版を開発した。

##### 5) プログラムフィデリティ尺度の開発

プログラムの質を担保できているかを評価するフィデリティ尺度を開発し、プログラム実施か所を訪問したアドバイザーが評価し、参加者や担当者のアウトカムとの関連を検討した。

##### 6) 新規プログラムの予備評価

プログラムの普及戦略に伴い、新たに精神科病院でプログラムを試行的に実施することになった。その採用のプロセスと試行的実施のプロセスを評価した。

#### 4. 研究成果

##### 1) プログラム採用の関連要因の検討

###### ケーススタディ

プログラムの普及に関連する要因を明らかにし、普及戦略に役立てることを目的とした。ヘルスケア提供組織におけるイノベーション普及の理論枠組みを基盤としたケーススタディである。この枠組みは、個人と組織によるイノベーションの採用・継続プロセスについて外的環境を含めて捉える。プログラムを採用した家族会3か所に所属する家族15人のインタビューデータを分析した。このインタビューでは、家族の背景、プログラム

採用の経緯、実施の経験が質問された。インタビューデータの逐語録から普及の理論枠組みに沿って記述部分を抜き出し、枠組みの要素ごとに分類し、3か所の採用・継続プロセスを比較した。その結果、プログラムの採用には、精神障がい者家族会の会員減少・高齢化・方針転換の必要性といった危機感、それらの問題をプログラムが解決するだろうという予測、および、家族会を存続・変化させたいという強い意思が影響していた。プログラムに協力的な家族の存在と資金の確保がプログラムを採用するためには必要であり、関係機関職員からのサポートが採用の後押しとなっていた。参加者集めの困難といった継続の難しさがあったが、期待した効果が得られた事実を知り、参加者からの肯定的フィードバックを得ることでプログラムの継続につながっていた。精神障がい者家族会へのプログラム波及効果を説明することや、関係機関職員に助言、資金面の支援、参加者集めについて協力を求めることが今後の普及に有効であると考えられた。

###### アンケート調査

プログラムを実施していない家族会を対象として、家族学習会の採用に関連する要因を明らかにすることを目的とした。

精神障がい者家族会連合会12か所と加盟する単位家族会を対象に、2013年6~9月に郵送で質問紙調査を実施した。分析枠組みは、ヘルスケア組織におけるプログラム普及の理論枠組みを適用し、プログラムの採用プロセスを2段階に分けた。第一段階のプログラムを把握する段階では、把握レベル(家族会で把握あり/家族会で把握なし)の2群、第二段階のプログラムの採用意思を決める段階では、実施予定(実施予定あり・検討/実施予定なし)の2群をそれぞれ従属変数とし、2群間で比較した。プログラムを把握した段階については、多重ロジスティック回帰分析を行い、検討した。その結果、10の精神障がい者家族会連合会から協力が得られた。加盟家族会のうち、家族学習会を実施したことのない177か所の家族会に調査票を送付し、110か所から回答を得た(回収率62.1%)。プログラムを把握する段階では、家族会所在市町村の人口が10万人以上であり(OR=5.53, 95%CI;1.93-15.89)、周囲にプログラムを積極的に勧める人がいて(OR=5.22, 95%CI;1.46-18.69)、連合会からプログラムのことを知った(OR=3.41, 95%CI;1.27-9.17)家族会ほど、プログラムを家族会で把握していた。プログラムの採用意思を決める段階では、プログラムを家族会で把握していた39か所を分析した。プログラムを実施予定・検討中の家族会は、実施予定なしの家族会と比較して、役員数が多く、プログラム実施に必要なマンパワーがあり、意欲的な会員がいると思われる家族会が有意に多かった。また、実施予定・検討中の家族会は、プログラムの難しさ・リスク・労力といったプログラムの実施

負担が少ないと思っており、プログラムを実施することで会員増や相互支援が進むことにつながっていると思われている家族会が有意に多く、プログラムが家族会や会員の関心と合致しており、周囲にプログラム実施に反対する人がいないと思われている家族会が有意に多かった。本プログラムを知ってもらうためには、影響力の大きい人との協力と連合会を通じた情報発信が有効であり、プログラムを採用してもらうためには、複数の家族会での合同実施、及び、家族会に未入会の家族を対象に実施する方法が有効である。

#### 2) プログラム継続の関連要因の検討

すでにプログラムを実施したことのある家族会を対象として、プログラムの継続意向に関連する要因を明らかにすることを目的とした。プログラム開発時の 2007 年度から 2012 年度に家族学習会を実施した家族会 59 か所を対象とし、自記式質問紙を送付し、郵送で回収した。分析枠組みは、ヘルスケア提供組織におけるイノベーション普及の理論枠組みを用いた。プログラムの継続意向を定期実施意向あり群と定期実施意向なし群の 2 群にわけて従属変数とし、家族会のシステムの素地、準備性、プログラムを実施した結果との関連をみた。その結果、56 か所の家族会から回答を得た。プログラムの継続意向を従属変数とした多重ロジスティック回帰分析では、プログラムの採用動機が新目標であること ( $OR=7.11$ ,  $p=0.005$ )、財源 ( $OR=1.98$ ,  $p=0.035$ ) が有意な関連を示した。家族会は、小規模作業所の運営という目標を失くし、新しい目標として家族の相互支援や学習を求めている。本プログラム内容は、その新しい目標と合致している。また、プログラムの継続意向に財源の確保が関連していた。今後は、家族会が行政などに補助金や助成金を申請する際に活用できるツールを提供することを含め、財政面を確保する取組みが必要である。

#### 3) 家族会への波及効果の検討

精神障がい者家族会未入会の家族を含めた会員外実施という点に焦点を当て、家族会の組織発展への影響を明らかにする。自記式質問紙を用いた横断研究とした。プログラムを 2012 年度までに実施した全国の家族会 59 か所に質問紙を郵送した。プログラム実施回数及びプログラムの会員外実施回数の 2 変数を独立変数、家族会の組織発展 (客観的指標と主観的指標) を従属変数とし、重回帰分析で関連をみた。その結果、回答があった 56 か所のうち、42 か所は会員外実施をしたことがあった。参加者 793 人のうち、300 人 (37.8%) が家族会未入会の家族であり、155 人 (51.7%) がプログラム参加後に家族会に入会していた。会員外実施コース数が多いほどプログラムからの入会者数が多く、プログラムによって会員数・新しい会員・若い会員が増加したと評価していた。家族ピア教育プログラムは、家族会の組織発展につながるプ

ログラムだと考えられた。

#### 4) グループ機能尺度の開発

Therapeutic factors are crucial mechanisms that promote change in self-help group members. Measuring therapeutic factors may improve practitioners' skills for assessment in whole-group contexts. We, therefore, examined the validity and reliability of a Japanese version of the Therapeutic Factors Inventory-19. The Therapeutic Factors Inventory-19 was examined using a self-report questionnaire completed by members of 38 family peer education self-help groups. The instrument measured the following four factors: instillation of hope, secure emotional expression, awareness of relational impact, and social learning. Participants were 246 group members. Test-retest reliability was analyzed using data from 46 participants. Confirmatory factor analysis showed a GFI of 0.85 and an RMSEA of 0.0088. Multitrait scaling analyses showed that items for instillation of hope and secure emotional expression factors correlated higher with their own factors than other factors. Each factor and the total average of the 19 items were significantly correlated with the Group Benefit Scale and Client Satisfaction Questionnaire. When level of interaction with other members was higher, subjects perceived a stronger presence of therapeutic factors. The intraclass correlation coefficients of each factor at a week interval were 0.848-0.915. The Cronbach's alpha of each factor and all items ranged from 0.767 to 0.960. In the case of family peer education self-help groups, there is acceptable validity and reliability for the average score of all items, and for the instillation of hope and secure emotional expression factors. However, more work is needed to increase the generalizability.

#### 5) プログラムフィデリティ尺度の開発

プログラム遷移を防止し、提供されるプログラムの質を担保するために、効果的援助要素を包含したフィデリティ尺度を開発することを目的とした。まずフィデリティ項目案を作成した。次に、プログラム実施場所でマニュアルに忠実に実施できるよう支援・助言するアドバイザー 72 名を対象として、2013 年 6~7 月に自記式質問紙調査を行い、フィデリティ項目案の必要度や意見を把握してフィデリティ項目を作成した。2013 年度はアドバイザーがプログラムの第 1 回目に実施場所を訪問し、フィデリティ項目を採点した。2013 年 10 月から年度内にプログラムを終了した 38 か所でプログラム最終回に自記式質

問紙調査を行った。アウトカム指標は Client Satisfaction Questionnaire 8 項目版、Group Benefit Scale、Therapeutic Factors Inventory-19 を用いた。フィデリティ項目の回答分布、項目間の相関、アウトカム指標との関連を検討した。その結果、フィデリティ項目案は、実施回数や実施時間などの基本的構造(9 項目)とグループ進行に関連するプロセス(21 項目)の 2 ドメインで構成した。アドバイザーを対象とした調査は 47 名から有効回答を得て、基本的構造(8 項目)とプロセス(5 サブドメイン 20 項目)で構成するフィデリティ項目を作成した。アドバイザーから提出された 36 か所のフィデリティ項目の点数を分析し、プロセス項目間で Spearman 相関係数が 0.5 以上の項目を集めてサブドメインとした。サブドメインは、全体の発言を重視した「全体で話し合う進行」、同じ家族による「ピアのおもてなし」、対等な発言を重視した「ピアグループの進行」、参加者の肯定的側面に着目した「肯定的フィードバック」の 4 つだった。収束的・弁別的相関係数による尺度化成功率は 100% だった。プログラムの最終回にいた 386 名のうち 283 名からアウトカム指標に関する質問紙が返送された。フィデリティ項目のうち、基本的構造 8 項目全てがいずれかのアウトカム指標と  $p < 0.1$  の関連を示した。プロセスのサブドメインのうち「肯定的フィードバック」以外はいずれかのアウトカム指標と  $p < 0.1$  の関連がみられた。基本的構造(8 項目)とプロセス(4 サブドメイン)の 2 つのドメインで構成するフィデリティ尺度を開発した。尺度は一定程度の妥当性が確認された。本尺度を活用することによってプログラム遷移を防ぎ、一定の質を担保したプログラムの提供に役立つと考えられる。

#### 6) 新規プログラムの予備評価

「家族による家族学習会」を精神科病院で実施することで、プログラムを運営・進行する担当家族と病院の精神保健福祉士(PSW)に何をもたらしたのかを明らかにすることを目的とした。病院 2 か所のプログラム担当 PSW と担当家族にインタビューを行い、逐語録を質的記述的に分析した。その結果、プログラムの実施は、家族の【社会変革の意識】を育てていた。PSW はプログラムの見学参加を通して、《家族理解の深まり》から《家族支援の課題とジレンマ》を感じ、【PSW として成長】していた。互いに《関係性の難しさ》を認識するも、PSW は《新しい関係性の新鮮さ》を感じ、家族は《一緒に取り組む関係性》を希望した。両者の関係性は、家族と PSW にとって新しい関係性と捉えられていた。この関係性はパートナーシップであると考えられた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計 14 件)

1. Kageyama, M., Nakamura, Y., Kobayashi, S., & Yokoyama, K.: Validity and reliability of the Japanese version of the Therapeutic Factors Inventory-19 (TFI-19J) A study of family peer education self-help groups. Japan Journal of Nursing Science, 13, 135-146, 2016. DOI:10.1111/jjns.12098.
2. Kageyama, M., Yokoyama, K., Nakamura, Y., & Kobayashi, S.: Changes in Families' Caregiving Experiences through Involvement as Participants then Facilitators in a Family Peer-Education Program for Mental Disorders in Japan. Family Process, Epub ahead of print 2 NOV 2015, DOI: 10.1111/famp.12194.
3. 蔭山正子, 横山恵子, 中村由嘉子, 大嶋巖: 精神障がいの家族ピア教育プログラムの普及: 「家族による家族学習会」のケーススタディ. 日本公衆衛生雑誌, 61(5), 221-232, 2014. [http://dx.doi.org/10.11236/jph.61.5\\_221](http://dx.doi.org/10.11236/jph.61.5_221)
4. 蔭山正子, 横山恵子, 中村由嘉子, 小林清香, 仁科雄介, 大嶋巖: 精神障がい者家族ピア教育プログラムの採用に関連する要因: 「家族による家族学習会」の普及研究. 日本公衆衛生雑誌, 61(10), 625-636, 2014. [http://dx.doi.org/10.11236/jph.61.10\\_625](http://dx.doi.org/10.11236/jph.61.10_625)
5. 蔭山正子: 精神障がい者家族会の組織発展と家族ピア教育プログラム「家族による家族学習会」との関連. 日本公衆衛生看護学会誌, 3(1): 31-39, 2014. [http://doi.org/10.15078/jjphn.3.1\\_31](http://doi.org/10.15078/jjphn.3.1_31)
6. 蔭山正子, 横山恵子, 中村由嘉子, 小林清香: 精神障がい者家族会の家族ピア教育プログラムの継続意向に関連す

- る要因．日本地域看護学会誌，17(2): 36-44, 2014.
7. 蔭山正子，大島巖，中村由嘉子，横山恵子，小林清香：精神障がい者家族ピア教育プログラムの実施プロトコル遵守に関する尺度開発：フィデリティ尺度．日本公衆衛生雑誌，62(4): 198-208, 2015.  
doi:10.11236/jph.62.4\_198
  8. 蔭山正子，横山恵子，小林清香，中村由嘉子：精神障がいの家族ピア教育プログラムの質的評価 プログラム事後の自由記載の分析．日本看護科学会誌，35:43-52, 2015.  
<http://doi.org/10.5630/jans.35.43>
  9. 蔭山正子，横山恵子，中村由嘉子：家族ピア教育プログラムを精神障がい者家族が継続実施することで得る利益 - プログラム事後調査．日本地域看護学会誌，18(1): 28-37, 2015．
  10. 蔭山正子，大島巖，中村由嘉子，横山恵子：精神障がいの「家族による家族学習会」の主観的評価 参加家族と担当家族への事後調査から．精神障害とリハビリテーション，19(2), 194-202, 2015．
  11. 蔭山正子，飯塚壽美，小林清香，横山恵子．精神障がい者の家族を支える家族ピア教育プログラム<第1報>必要とされる背景とプログラムの概要．コミュニティケア，15(4):65-67, 2013.
  12. 横山恵子，飯塚壽美，小林清香，蔭山正子．精神障がい者の家族を支える家族ピア教育プログラム<第2報>「家族による家族学習会」の実際と今後の可能性．コミュニティケア，16(1):66-69, 2014.
  13. 蔭山正子，横山恵子，小林清香，飯塚壽美：精神障がい者家族のリカバリーを支える家族ピア教育プログラム，家族看護，12(1):148-152, 2014.
  14. 蔭山正子，小林清香，横山恵子，中村由嘉子：精神科病院での「家族による家族学習会」実施がもたらした家族と精神保健福祉士のパートナーシップ：インタビュー内容の質的記述的分析．精神障害とリハビリテーション,印刷中．
- 〔学会発表〕(計7件)
1. 蔭山正子，横山恵子：精神障がい者家族による家族ピア教育プログラム「家族による家族学習会」の質的検討 - 中心的な家族が考える核となるプログラム要素．第16回日本地域看護学会，徳島，2013.8.3-4.
  2. 横山恵子，蔭山正子：「家族による家族学習会」に取り組んだ精神障害者家族会の変化．第24回日本精神保健看護学会学術集会・総会，横浜，2014.6.22
  3. 蔭山正子，横山恵子：家族ピア教育プログラムにおいて進行役の家族が変化するプロセス．第17回日本地域看護学会学術集会，岡山，2014.8.2 (優秀ポスター賞受賞)
  4. 蔭山正子，横山恵子，中村由嘉子，小林清香，仁科雄介，大島巖：精神障がい者の家族ピア教育プログラムにおける家族の体験 自由記載の分析．第73回日本公衆衛生学会総会，宇都宮，2014.11.5
  5. 中村由嘉子，蔭山正子，横山恵子，小林清香，仁科雄介，大島巖：家族学習会が家族と支援者の関係性に与えた影響とパートナーシップ形成のプロセス．第73回日本公衆衛生学会総会，宇都宮，2014.11.5

6. 中村由嘉子, 横山恵子, 蔭山正子, 小林清香, 仁科雄介, 大島巖: 家族ピア教育プログラム「家族による家族学習会」の立ち上げと普及に必要な要素. 第10回日本統合失調症学会, 東京, 2015年3月27-28日

7. 蔭山正子, 川辺慶子, 横山恵子, 桶谷肇, 大島巖, 中村由嘉子, 小林清香, 綾部小百合, 飯塚壽美, 岡田久実子, 柏木彰, 倉澤政江, 佐藤美樹子, 永野昭二, 貫井信夫, 原晴美, 米倉令二: 家族ピア教育プログラム「家族による家族学習会」の精神科病院への導入: 普及研究, 前橋, 第11回日本統合失調症学会, 2016.3.25-26.

〔図書〕(計1件)

1. 蔭山正子, 大嶋巖, 横山恵子, 桶谷肇, 二宮史織, 仁科雄介: 家族学習会の特徴と効果. 地域精神保健福祉機構編. 家族による家族学習会ガイド-精神障害をもつ方の家族のために-. 千葉: 地域精神保健福祉機構, pp.31-46, 2013.

〔産業財産権〕  
出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織  
(1)研究代表者  
蔭山 正子 (KAGEYAMA, Masako)  
東京大学・大学院医学系研究科・助教  
研究者番号: 80646464

(2)研究分担者 ( )

研究者番号:

(3)連携研究者  
横山 恵子 (YOKOYAMA, Keiko)  
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授  
研究者番号: 80320670

大嶋 巖 (OSHIMA, Iwao)  
日本社会事業大学・社会福祉学部・教授  
研究者番号: 20194136